

『今昔物語集』震旦部研究略史（その二）

宮 田 尚

五

第二次大戦後の説話文学研究の高まりのなかで、従来の研究をふまえ、それらを厳密に点検して『今昔物語集』研究の基礎をきづいたばかりでなく、さらにおおきく前進させる原動力となったのは、山田孝雄父子による日本古典文学大系本『今昔物語集』（岩波書店、一九五九・三―六三・三二）であった。

詳細な解説と頭注と、そして巻末に補注と校異とをそなえ、本文には読みを付すなど、まさにそれは、テキストの概念を越えた総合的な研究書の観を呈している。

『大系』でうち出された新機軸のひとつに、鈴鹿本の採用がある。底本として用いられた鈴鹿本は、馬淵和夫（今昔物語集伝本考、国語国文、一九五一・五）によれば、現存する諸本の祖本であり、原本からあまりへだたりのない位置にあったものだという。鈴鹿本の欠けている巻については、東大国語研究室本（旧紅梅文庫本）を底本として用いている。

さて、震旦部の出典研究の面にかぎって『大系』の特色をいえば、

『今昔物語集』震旦部研究略史（その二）

つぎの四点になるだろう。

(1) 前田家本『冥報記』を出典と認定したこと。

(2) 『弘誓法華伝』を出典と認定したこと。

(3) 船橋本『孝子伝』を出典と認定したこと。

(4) 巻十を中心に、〈敷衍〉〈換骨奪胎〉〈潤色〉等の視点を導入して、単一の出典に依拠したとする従来の諸説を修正したこと。

(1)・(2)は、さきにふれた片寄正義説を追認したものだ。『冥報記』と『弘誓法華伝』にかかわるはなしは、おおむね『法苑珠林』と競合する立場にあり、これらを出典だと認定したことによって、『攷証今昔』が全面に押し出した『法苑珠林』は、おおきく後退させられることとなった。

(3)は今野達説を追認したものだ。今野達は「陽明文庫蔵孝子伝と日本説話文学の交渉」（国語国文、一九五三・三二）において、「陽明文庫蔵孝子伝こそ今昔物語集震旦部の世俗孝子譚の出典」だと主張。その後、京都大学蔵の船橋本『孝子伝』を調査するにおよび、九三・四・五・六・七・八・九・一〇・一一・一二・二〇・四三・四四・四五・四六・一〇一の十六話については、船橋本『孝子伝』が出典だと前説を訂正した

(古代・中世文学の形成に参与した古孝子伝二種について、国語国文、一九五八・七)。「大系」はこれを承けているわけだ。

もつとも、今野達は船橋本が、平安時代に流布していた『孝子伝』の流れを汲むものであることを確認したうえで、便宜的に、天正八年(一五八〇)書写の船橋本を〈出典〉だとしているのだが、『大系』はその手続きを省略して、船橋本を〈出典〉だとする結論だけを示している。頭注という制約の中のこととて、やむをえない面はあるものの、誤解を招く処理であった。

なお、十1「長安女、代夫違枕為敵被殺語」に関して、『大系』は『古女列伝』を出典としてあげている。ここでは船橋本「孝子伝」は、なぜか類話としてもとりあげていない。

なおまた、今野達説とのからみでいうと、『大系』で判然としないう点が今一点ある。『注好選』を、十40「利徳、明徳興酒堂行会語」にだけ類話としてかかっているのがそれだ。『注好選』を類話としてとりあげたのは、「注好選集について」(国語・一九五三・九)をふまえてのことかとおもわれるが、今野達はそこでは、十40をふくむ計四二話を類話として指摘している。「大系」のとりあげている十40だけが、他に比して、『注好選』の当該話と格別類似度が高いというわけでもない。『注好選』については、後で今一度ふれる。

それはとあもれ、『大系』が独自の見解を示しているのは(4)だ。『出典攷』や『攷証今昔』が〈出典〉だと指摘した大部分の資料について、それをそのまま継承することを『大系』は避けている。他の巻での『三宝感應要略録』や『冥報記』などに比して、巻十の〈出典〉は、いかにも類似度が低いからだ。たしかにこれらは、とうて

い同一に論じられる性質のものではない。

従来の出典研究は、すでにふれたように、発見しえた類話のなかで、もつとも類似度の高いものを〈出典〉だと認定してしまう傾向があった。『大系』はそうしたありように疑義を呈したのだ。

とはいえ『大系』は、既存の説と訣別したのではない。既存の説に疑義を表明し、それと一定の距離をたもちつつも、既存の説との妥協をはかっている。そのための方法が、〈敷衍〉(換骨奪胎)等の視点の導入だった。

既存の説をそのまま容認するわけにはいかないけれど、さりとて、それらにとつてかわるべき資料が見出せないという事情が、いわゆる摺りあわせの論理を呼んだのであろう。

既知の資料のさし示す範囲で状況への説明を試みている点において、『大系』は従来の出典研究の延長線上に位置しているといわなければならぬ。既説への疑義が、『大系』にあつては、未知の資料の介在した可能性への追求にむかって踏み出す契機とはなりえていないのだ。同様のことは、天竺部についてもいえる。

出典研究とはそもそも、未知の資料との出会いを求めるところより発する営為のはずだ。『今昔物語集』の用いた資料のすべてが現存し、かつまた、それがつきとめられているとの保証がないかぎり、未知の資料への視角は、つねに用意しておかなくてはなるまい。

たしかに巻十は、出典研究の現段階でみるかぎり、震旦部の他の巻とは肌合を異にしている。しかし、この巻だけが、〈敷衍〉(換骨脱胎)をおおはばにおこなっているとは考えにくい。げんに、東寺観智院本や金剛寺本の出現によって一躍注目をあつめた『注好選』

は、巻十に関して十五話の類話を有しており、そのうちの十三話は、これまでに報告されているものよりも類似度が高い。『今昔物語集』の成立に關与した資料がそのままのかたちで発見されることは期待出来ないにしても、そうした資料の存在を裏付ける資料は、今後も出現する可能性はあろう。

巻十にもちいられている資料のなかには、仮名書きのものもふくまれていたようだ。池上洵一は欠文の出現状況から、直接的出典とみなしうる漢文文献は皆無に近く、その多くはすでに口語りないし、和文体の説話として広く流布していたものに拠っているであろうと推定（欠文の語るもの、文学、一九六四・一）。また、山口佳紀も、仮名書き自立語の出現状況から、天竺部および巻十で従来出典だとされているものは、おそらく直接の出典ではなく、出典には漢字以外に、漢字片仮名交じり文や仮名文がふくまれていたであろうと推定している（今昔物語集の形成と文体、国語と国文学、一九六八・八）。

仮名書きの出典として、『大系』以後、大方の認めるところとなっているものに、『俊頼髓脳』がある。古くは酒井金次郎（今昔物語集の成立年次臆説、文学、一九三三・十二）の説があり、『大系』と同時期に橋健二（今昔物語集』と『俊頼髓脳』との関係、奈良女子大付属高校研究紀要、一九六二・十二）と、今野達（今昔物語集の成立に關する諸問題、解釈と鑑賞、一九六三・一）とが、あいついで、『俊頼髓脳』をとりあげ、『今昔物語集』の出典たるべきことを論じている。

以来、池上洵一（欠文の語るもの、前出）、野口博久（俊頼髓脳、

解釈と鑑賞、一九六五・二。歌論書と説話文学、『日本の説話』中世Ⅱ、東京美術、一九七四・六）、河内山清彦（今昔物語集成立論の一視点、国語と国文学、一九六七・十）、福本雅一（今昔物語集 且部巻十、帝塚山短大研究年報、一九七一・十二）、池田富藏（『源俊頼の研究』、桜楓社、一九七四・二）、小峯和明（『俊頼髓脳』と中国故事、中世文学研究、一九八二・八）、宮田尚（下和が血の涙、『和歌文学とその周辺』、桜楓社、一九八三・一）、国東文麿（『今昔物語集作者考』、武蔵野書院、一九八五・十二）らが、それぞれの立場から論及している。『俊頼髓脳』を『今昔物語集』の出典のひとつだとみえることは、ほぼ定着したといつてよいようだ。

もっとも、出雲路修（散逸入宇治大納言物語の冒頭部を論ず、講座平安文学論究、一九八七・六、『説話集の世界』、岩波書店、一九八八・九に改稿して収録）は、「通説とは逆のようだが」としてうえで、『俊頼髓脳』と『今昔物語集』とはともに、中国説話をやわらげた先行資料に拠ったと主張。出雲路修はその先行資料を源隆国編するところの『宇治大納言物語』ではなかったかと推定している。

『俊頼髓脳』と『今昔物語集』との関係を、『今昔物語集』から『俊頼髓脳』へとしたのは岡田希雄（今昔物語の成立年次に関する疑問、文学、一九三三・十）がおそらく最初だろう。この論はしかし、ただちに、先述の酒井金次郎によって批判された。現在では、酒井金次郎説の方向が大勢となっているのだが、この間には、直接関係を認めず、両書簡の類話現象は、巻間に流布していたはなしをそれぞれが別個に採集したものだとする松本治久（『今昔物語集』と『俊

頼髄脳、跡見学園紀要、一九六五・三)の説などがある。

『今昔物語集』と『俊頼髄脳』の関係にふれた論としては、このほか、『今昔物語集』と重複する中国故事をとりあげて、『俊頼髄脳』を論じた矢作武(『天の河うき木に乗れる』類歌と張鸞乗査説話について、相模国文、一九七八・三)、後藤祥子(『浮木にのつて天の河にゆく話』、国文目白、一九八三・三)、あるいは小川豊生(『俊頼髄脳』の歌話と説話、『中世説話とその周辺』、明治書院、一九八七・一二)、田中徳定(『俊頼髄脳』の説話引用態度について、駒沢国文、一九八八・二)、黒田彰子(『張鸞考』、国語国文、一九八九・十)等がある。『今昔物語集』に収斂していく過程での、『俊頼髄脳』を示唆して興味ぶかい。

藏中進は六三『農旦梁武帝時、達磨渡語』に関して、『出典』の再検討をすべきことを主張している(『今昔物語集』の出典、神戸外大論叢、一九六六・六)。「体系」の提示のした《出典》にもなお検討の余地はある。『今昔物語集』の成立に関与した資料のすべてが今日に伝えられているとは限らない以上、出典の深索は続けなければならぬ。探り当てた類話に対しては、慎重に検討する必要がある。

六

『大系』の踏まえた所説のひとつに、国東文麿の組織論がある。『今昔物語構想論』(国文学研究、一九五二・十)、『今昔物語集世俗説話(本朝)の巻序について』(国文学研究、一九五四・二二)、『今昔物語巻八と仏法部組織の成立』(国文学研究、一九五六・八)、

『今昔物語集の説話展開様式』(早稲田商学、一九五九・一)など、あいついで発表した国東文麿の組織論の中核をなすのは、国東自身によって二話一類様式と名づけられた説話配列方式の発見であった。

国東文麿は、二話一類様式の説話配列が『三宝感応要略録』に発するものであることを指摘し、『三宝感応要略録』と『今昔物語集』との構成の対応状況から、たとえば『今昔物語集』の巻八は、諸菩薩靈験譚が配されるはずの巻だと判断。そのうえで巻八が欠巻であることの理由について、『三宝感応要略録』所収の諸菩薩靈験譚だけで巻八を構成するには話数がたりないため、他の資料をあわせ用いようとしたものの、機が熱さないうちに、編集を中断せざるをえない事情が生じたものと推定した。

国東文麿によれば、巻八だけでなく、巻十八、巻二十一の両巻についても同様で、欠巻は後発的な事情によるものではなく、当初からのものであり、もっぱら編集の側に成因があるということになる。『今昔物語集』の未定稿説は、すでに馬淵和夫が欠文の検討をとおして提唱し、『今昔物語集』における欠文の研究、国語国文、一九四八・十二)、さらにそれを、鈴鹿本の調査にもとづいて補強している(『今昔物語集伝本考』、国語国文、一九五一・五)。

したがって国東説は、これを別の角度から論証したかたちになっている。『大系』は巻八、十八、二十一の相当個所に、欠巻事情に関する合理的な説明として、国東説をそれぞれ要約してかかげた。国東説はやがて一書にまとめられ、『今昔物語集成立考』(一九六二・五)として刊行された。説話文学会の結成された年であった。

『今昔物語集』が巻を単位としての類纂であるばかりでなく、各話の配列にも意をはらったものであるらしいことは、はやく芳賀矢一も気付いていた。「各巻には、自ら同種類の説話を彙類して、余程整って居る所が見える。之れを天然・震旦の部に続くものとして見れば、最初から一定の目的を以て、此の物語を記述したかと察せられる」と、『攷証今昔』の序論で指摘している。

しかし、それ以上に踏み込んだ解釈は、だれもしなかった。それを国東文麿は、新資料を用いてではなく、『出典攷』以来、震旦部の出典だとされてきた周知の資料、『三宝感應要略録』を用いて説明してみせたのだ。

国東説の根幹をなすのは、いまいうように二話一類様式の説話配列である。全巻を二話一類の整然とした配列で統一するためには、綿密周到な用意がなされていなければならず、そのためにはまた、前提として相当量の資料が収集されていなければならない。こうした営為にはとうぜん、ほう大なエネルギーを要するであろう。

国東文麿はこれを「帝王の意識」に裏打ちされたエネルギーだととらえ、撰者に白河院を想定した。白河院を中心とする側近グループの編集だというのである。

しかし、編集に要したであろうエネルギーと、政治権力の誇示を志向する帝王的エネルギーとは、等質とはいえない。エネルギーの量をテコとして重心を移動させるためには、なお説明が不足している。側近グループの存在や、勅撰であることを裏付ける歴史史料に欠けるという弱点もあった。また、表記の特徴から、『今昔物語集』の体裁を整えた最終責任者は、あるいは一人ではなかったのかとの

批判も出されている（池上洵一、欠文の語るもの、前出）。

こうした事情もあって、白河院勅撰説は大方の支持を得るにいたらず、後に、国東文麿もこれを撤回した。白河院勅撰説を撤回して国東があらたに提唱したのは、源俊賴撰者説であった（『今昔物語集作者考』、武蔵書院、一九八五・十二）。

編者論の推移についてはさておき、『今昔物語集』の編集に綿密周到な用意と、それを支える強力な意志の存在が不可欠であることであきらかにした二話一類様式の発見は、とうぜんのことながら『今昔物語集』研究のさまざまな局面に波及していくわけで、肯定するにせよ否定するにせよ、ひとたびは通過せざるをえないチェックポイントとなった。

二話一類様式に対する疑義や批判も、もちろんある。もっともはげしく否定したのは河内山清彦であった（今昔物語集成立論の一視点、前出）。河内山清彦は巻二四を対象に歌集との関連を検討した結果、限られた資料を「恣意的、機械的に組合せた」にすぎず、「その当然の帰趨として、ここには一定の理念や秩序をもった編集物とは決して言えないような支離滅裂な混乱状態が存在する」と主張。さらに、二話一類について「この論法が論理として破綻しているのは、一つの事項と他の事項との間のわずかな連続面だけで二つを密接不可分のごとく結合し、より大きな切断面を無視してかかるところにある。不連続面を捨象すれば、今昔物語集のごとき微温的なながらも類聚性をもつ作品はもとより、そうでない雑纂的な短篇作品の集録物においても、相隣れる二話ずつの関連性を探索して二話一類様式にもとづく構成を論ずるのは容易である」と、真向から否

定した。

たしかに二話一類の展開には、破綻もある。それはけつして完璧ではない。国東文麿が『成立考』の増補版（一九七八・五）に付した全説話の展開表においても、連想契機の説明に苦心したふしのががわれるところや、無理筋かとおもわれるところがある。

だが、河内山清彦のいうように、「不連続面を捨象」して、「わずかな連続面だけで二つを密接不可分のごとく結合」したので、ないことは、総体的にみるときあきらかだろう。国東文麿が連続面を強調することに意を払っていることはたしかだが、それ以上に、河内山清彦は不連続面を強調することに意である。

坂口勉（『今昔物語集』研究の一視点、『芳賀幸四郎先生古希記念日本文化史研究』、笠間書院、一九八〇・五。『今昔物語の世界』、教育出版、一九八〇・二）の批判は、『今昔物語集』各説話の接続状態に、つながりを重視した、密接な組合せがあることを認めたくてで提起されているところに特色がある。坂口勉はその接続を、連想力の自由な發揮と競合によるものだとらえ、連想行為の成立する場面と条件を歴史的に究明することが必要だと主張する。

語りの機能と、その場の解明は、ひとり『今昔物語集』のためだけではなく、説話文学研究一般にとつても重要な課題だ。

しかし、「自由な連想による語りの連続」を強調しようとするれば、目的意識に裏打ちされた『今昔物語集』の、いわば禁欲的な側面がおさえきれないだろう。もともと、連想を抜きにした類聚はありえないのであり、むしろ問われなければならないのは、類聚の主旨に沿ったところの（不自由さ）の中で、『今昔物語集』が、いかに自

分を主張しえているかだろう。

国東文麿の二話一類様式説に、もんだいがあるとすれば、それは『今昔物語集』を完成作だとらえ、整然とした組織性を強調せんがために、破綻や未整備の状態がなお残っていることを認めようとしていない点だろう。

『今昔物語集』が未完成作品であることは、欠巻が存在するという点についてのみいいうるのではない。馬淵和夫（『今昔物語集』における欠文の研究、前出）や池上洵一（欠文の語るもの、前出）が指摘しているように、それは表記の面からもいいうるし、説話配列の修正を試みた試行錯誤の痕跡からもいいうる。説話配列の修正の痕跡は、震旦部に関していえば、巻十に顕著にみられる。同様の例は、天竺部にも本朝部にもみとめられる。『今昔物語集』は、完成に向かつて整備がすすめられる途次にあるのである。

『今昔物語集』はなおゆれているのだ。今成元昭のいう不成立（『今昔物語集』の不成立をめぐる）、説話文学研究、一九七七・六）とは別な、形而下の意味においても、『今昔物語集』の未完成は基本的な認識としておさえておく必要がある。

一部に瑕疵があるからといって、このばあい、それが『今昔物語集』全体におよぶものではない。たとえ一部に破綻があったとしても、二話一類の配列で全巻を統一しようとした構想の壮大さはゆるがないし、この段階に至るまでに要したエネルギーにも、はかり知れないものがあつたはずだ。

国東文麿の組織論は、ややもすれば、二話一類の説話配列の発見という側面のみが強調されがちだ。むしろそれはきわめて重要な発

見ではあるが、見落としてならないのは、〈ななに〉が用いられているかをもんだいにしてきた従来の出典研究から脱皮して、〈いかに〉用いたかの視点を導入した点だろう。二話一類の発見は、いわば、その結果にすぎないのだ。

震旦部に関する国東文麿の業績に、いまひとつ、訳注がある。講談社学術文庫の一環として、天竺部に引き続き、震旦部の全話について、注と訳とを施した(一九八三・十一―一九八四・二)。天竺部、震旦部を含め、『今昔物語集』の口語訳は、すでに池上洵一によって公刊されている(東洋文庫、一九六六・十二―一九八〇・八)が、池上洵一のものが口語訳だけであるのに対して、国東文麿の読みを示した〈注〉と〈参考〉とを付したところに特色がある。

七

一九六〇年代に、中国文献との関連をとおして、説話文学盛行の背景に唱導があることを説いたのは川口久雄だ。

「今昔物語集と古本説話集について」(文学、一九五五・四)、
「敦煌変文の素材と日本文学」(金沢大学法文学部論集、一九五六・六)、
「八相成道変文と今昔物語集仏法説話」(金沢大学法文学部論集、一九五七・三)、
「今昔物語集の形成と編集」(解釈と鑑賞、一九五九・六)、
「日本説話文学と外国文字とのかかわり」(解釈と鑑賞、一九六五・二)などの一連の論文において川口久雄は、『法苑珠林』『捜神記』ほかの文献、あるいは敦煌出土の変文などをふまえて立論し、『今昔物語集』については、僧団に属する人びとが、唱導説法の種本として編んだものだとの見解を示した。

『今昔物語集』震旦部研究略史(その二)

『今昔物語集』が仏教の強い影響下にあることは、天竺・震旦・本朝各部の冒頭に、それぞれの地での仏教創始に関するはなしが配されているその構成からしても、疑いはない。げんに『出典攷』以来、素材源として漢訳仏典が探索され、それらのうちのいくつかは、今日でも出典とみとめられている。資料の面からも『今昔物語集』は仏教に依存しているのである。坂井衡平が『新研究』で、『今昔物語集』の仏教文学としての側面をとりあげたのは、ゆえのある措置であった。

『今昔物語集』と唱導とのかかわりも、はやく筑土鈴寛が提唱(唱導と説話文学、『復古と叙事詩』、一九四二・十二)。さらに片寄正義は、『研究(上)』で、『今昔物語集』をとりまく環境のひとつとして、唱導の隆盛が見落とすことのできない意味をもつことを『言泉集』『普通唱導集』などをふまえて説いている。

『今昔物語集』を布教活動の第一線に位置づけようとする川口久雄の右の見解は、説話の伝承性を重視し、こうした研究の流れをさらに大胆に押しすすめたものであり、『今昔物語集』を日本の『法苑珠林』たらしめんとした作品だと仮定するなど、随所に斬新な提言をふくんでいる。

ただ、唱導の種本説は、学界に新鮮な衝撃をあたえた割には、以後の研究にさほどおおきな影響力をもちえなかった。飛躍がおおく、実証性に欠けていたからであろう。

同じ川口久雄の『真報記と今昔物語集等について』(金沢大学法文学部論集、一九六七・三)は、これも末尾に、『打聞集』を『今昔物語集』からの伝聞が変化したものだとしたり、その『打聞集』

を整理して文章化したものが『宇治拾遺物語』だとするなど、いささか大胆にすぎる見解をそなえてはいるものの、『冥報記』の諸本や影響史に関する解説としては、詳細で、手ぎわよくまとめられており、示唆するところがおおきい。一九四一年に、『支那仏教説話集』と我が国説話文学との関係（前出）の連載予定を、一回だけで中止せざるをえなかった不完全燃焼分のエネルギーを、『冥報記』にむけて放出したかのようにみえる。

いずれにしても川口久雄の一連の論は、〈へいかに〉を強く意識したものであった。見解の当否はさておき、研究史の転換を加速させる効果はあったといつてよいだろう。

川口久雄が、直接関係の有無にとらわれることなく大胆に立論したのとは対照的に、中世の日本に依存したことがたしかな資料を対象として、克明な調査にもとづく実証的な論を展開したのは今野達だった。今野達がとりあげたのは、さきにふれた『孝子伝』であり、『俊頼髓脳』であり、さらには『注好選』であった。巻九および巻十の出典の一部に、『孝子伝』や『俊頼髓脳』がふくまれていることをあきらかにした今野達の提説は、漢訳仏典の探索を中心にするめられてきた従来の出典研究の欠をおぎなつたばかりでなく、限られた資料をやりくりして編集された『今昔物語集』の姿を浮き彫りにした（今昔物語集の成立に関する諸問題、前出）。

『注好選』が『今昔物語集』の研究に資するところのおおきい資料であることを、はじめて指摘したのも今野達の重要な業績のひとつだ。

もつとも今野達は、この段階では『注好選』を、〈今昔物語集以前

においてとらえてはいない。『陽明文庫藏孝子伝と日本説話文学の交渉』（前出）、「古代・中世文学の形成に参与した古孝子伝二種について」（前出）、および「注好選集について」（前出）において今野達は、『注好選』を『今昔物語集』の影響下にある作品だと位置づけている。

馬淵和夫（『今昔物語集』における言語の問題、解釈と鑑賞、一九五九・六）によれば、右の説を発表した数年後には、今野達は『今昔物語集』と『注好選』との関係は稀薄になったと、自説への修正の見解を述べていたようだ。『新注今昔物語集選』（大修館刊、一九六九・七）の解説において、影響は直接的なものだとは断じがたいと前説を部分修正したのは、それからさらに十年後のことであった。

だが、まだ『注好選』を〈今昔物語集以前〉に置きなおすことはしなかった。

これに対して本田義憲（敦煌資料と今昔物語集との異同に関する考察（Ⅱ）、研究年報、一九六六・二）は、『今昔物語集』から『注好選』へとの流れを認めず、両者のあいだには共通母胎があったもの」と指摘。宮田尚（今昔物語集出典研究の点検（その二）、国文学研究『梅光女学院大』、一九七一・十一。今昔物語集天竺部小考、説話文学研究、一九七二・九）も、『今昔物語集』から『注好選』への直接的な影響関係を認めず、『注好選』は『今昔物語集』に影響をおよぼした資料の姿を伝えるもの」とらえた。前後して高橋俊夫（今昔物語集と注好選集、国学院大学大学院紀要、一九七二・三三）も、『今昔物語集』と『注好選』と関係を論じて、共通母胎を推定。そしてその本文は、『注好選』に酷似したものとの見解を示した。

宮田尚、高橋俊夫両名の論には手続き上の欠陥があると批判した森正人も、結論としては共通母胎を承認した(今昔物語集の基礎的研究、愛知県立大学文学論集、一九七八・三)。また、高橋伸幸も「私聚百因縁集」を論ずるなかで、『今昔物語集』と『注好選』との関連に言及し、同様の所見を述べている(「私聚百因縁集」の出典に関する報告、中世文学、一九八一・十二)。

一方、酒井憲二は文化十年(一一八三)ごろ東寺文書を調査した伴信友が、記録ノートである『東寺古文零聚』に、今は失われてしまっている『注好選』の奥書を書きとめていたことを発見(再び伴信友に導かれて今昔物語集の成立について考える、国語国文、一九八二・九)。「東寺古文零聚」の出現によって、『注好選』の成立は仁平二年(一一五二)以前であることが判明した。

『注好選』の成立時期については手がかりが乏しく、それまでは今野達が『私聚百因縁集』とのからみで提起したところの、正嘉元年(一二五七)以前だとの説があるだけであった。それだけに、仁平二年以前の成立であることがあきらかにされたことの意味はおおきい。『今昔物語集』と『注好選』との時間的距離は、いっきに近づいた。

こうしたなかで、東寺観智院本『注好選』が発見され、馬淵和夫の釈文つきによる影印本として刊行された(東京美術、一九八三・十)。「注好選」はそれまで、上巻と中巻の一部からなる書陵部本が知られているだけであった。新出の東寺観智院本は、虫損の跡等からみても書陵部本の祖本であることはほとんど疑いがなく、しかもそのうえ書陵部本に欠落している部分を備えていた。

『今昔物語集』震旦部研究略史(その二)

東寺観智院本の刊行にさきだつて、今野達はこれに詳細な検討を加え、東寺観智院本が「不揃えの寄せ集め本」であることを論証するとともに、『今昔物語集』の影響史をたどりうる資料だとした前説を訂正し、現段階ではと条件を留保したうえで、あるが、『注好選』を『今昔物語集』の出典だと認定した(東寺観智院本『注好選』管見、国語国文、一九八三・二)。なお『注好選』に関する論としては、今野達にはほかに「童子教と注好選集」(説話文学研究、一九八〇・六)がある。

東寺観智院本の出現が契機となつて、『注好選』への関心は高まり、それを巡る状況が、少しずつあかろみに引き出されはじめた。

資料的な面では高橋伸幸が、『大経直談要注記』(小経直談要注記)「当麻曼陀羅疏」等に引用されていることを報告(中世文学会大会、一九八〇・十)。高橋伸幸はさらに、『小阿弥陀経私抄』にも『注好選』が引用されていることを報告した(小阿弥陀経私抄)所引の『注好選』(一・二二)、いずみ通信、一九八六・十一―八七・七)。また小峯和明は、日蓮の蔵書の中に『注好選』があったことを、蔵書目録である『本尊聖教録』に見出した(今昔物語集天竺部の形成と構造、徳島大学教養部紀要、一九八〇・三)。「今昔物語集の形成と構造」、笠間書院、一九八五・十一に収録)。

東寺観智院本は写本である。奥書にいう仁平二年は、書写された時期を示すものだ。「注好選」の成立時期は、さらにさかのぼる。しかも仁平二年以前に、すでに異本を生ずるほどに、それは流布していた。この点は、東寺観智院本の上巻六一話の本文中に校合した異本の書入が混入していることから、また、中巻と下巻とのあい

だにみとめられる七話の重出現象から面白い。

高橋伸幸や小峯和明の報告は、こうした『注好選』の流布が、中世においても続いていたことをさし示したものだ。

中世における『注好選』の流布の状況を、さらにはつきりと証明したのは、後藤昭雄による金剛寺本の発見であった。後藤昭雄は金剛寺本の概要を発表（金剛寺本『注好選』の出現、文学、一九八七・十）した後、本文を影印刊行した（和泉書院、一九八八・十）。

元久二年（一二〇五）の奥書を有する金剛寺本は、中巻と、下巻の一部からなる零本であるが、東寺観智院本にない話を中巻に連続して二〇話そなえており、そのなかには高橋伸幸が、『小経直談要注記』所引として報告した二話がふくまれている。つまり金剛寺本は、東寺観智院本を補完するものであると同時に、それとは別系統の、『注好選』の流れをくむものであることを示している。右二〇話のなかに、『今昔物語集』との共通話はふくまれていない。しかし、『今昔物語集』研究における『注好選』の比重が飛躍的に増大してきているだけに、たとえ後代の書写にかかるとはあっても、異本の出現したことの持つ意味はおおきい。

東寺観智院本の出現をうけて、今野達がこれに詳細な考証を加え、『注好選』を『今昔物語集』の典故としたことは右にふれた。小峯和明はこれを基本的に支持し、「注好選の作品は天竺・震旦部双方にまたがる格好の資料だったはず」（今昔物語集震旦部の形成と構造、徳島大学教養部紀要、一九八二・六、『今昔物語集の形成と構造』に収録）との立場をとった。ただし小峯和明は、『注好選』が『今昔物語集』に直接していると断定することを避けて、『注好

選の資料』としている。これは、東寺観智院本にせよ、書陵部本にせよ、現在確認することの出来る『注好選』が、いずれも残欠本であることを配慮したものだ。

宮田尚（今昔物語集と注好選・再考、日本文学研究〔梅光女学院大〕、一九八三・十一）は、『注好選』が典故である可能性は強まったものの、東寺観智院本が『今昔物語集』に直接しているとは考えられず、異本への考察が必要だと指摘。高橋敬一は東寺観智院本の中・下巻の重出現象や、『今昔物語集』と『注好選』との副詞の比較をとおして、『注好選』を『今昔物語集』の典故と認めるとともに、重出現象は依拠本が異本関係にあったことによるものと推定した（『注好選』研究一試論、文献探求、一九八五・二）。「今昔物語集」天竺部の文体形成、国語国文学研究、一九八六・二）。

なお、『注好選』に概括的な説明を加えたものに、『日本短篇物語集事典』（東京美術、一九八四・十、宮田尚記）、「日本古典文学辞典」（岩波書店、一九八四・七、今野達記）がある。前者は『説話文学必携』（一九七六・十）が改称して再版された際、東寺観智院本の出現をうけて改稿されたもの。

（未完）